「教会の始まり」

使徒言行録２：36～47
コリントの信徒への手紙１　3：7～9

２０２３年6月11日
野村　友美 師

＜花の日、こどもの日＞

今日は６月の２週目の日曜日で、キリスト教会の暦では花の日、子どもの日です。

この花の日、子どもの日は、１９世紀から２０世紀にかけてアメリカの日曜学校の中から生まれてきた記念日だそうです。

夏の花が咲き始める時期、教会が子どもたちの成長と祝福を願って祈る日。それが今日、６月の第２日曜日なんです。教会はすべての人が同じように招かれている場所です。年齢も性別も社会的な立場も、持っている知識も力も関係なく、神様は私たち一人一人を今日もこうやって呼び集めておられます。

イエス様も、ご自分のところに集まってくる人たちを区別なさいませんでした。ある人々が子どもたちを連れてきてイエス様に祝福してもらおうとした時、弟子たちは彼らを叱りつけました。ここは大人がイエス様の話を聞くための場所だ、何もわからない子どもなんかが来るところじゃない、うるさく騒がれたらイエス様にも他の人たちにも迷惑だ。そんな風に考えたんでしょうね。

子どもたちを追い払おうとした弟子たちに向かって、イエス様は言われました。

「子供たちを来させなさい。わたしのところに来るのを妨げてはならない。

天の国はこのような者たちのものである。」

（マタイ１９：１４）

そしてイエス様は子どもたちに手を置いて祝福された、と福音書は伝えています。純真で汚れがない子どもたちこそイエス様の祝福にふさわしい、という話じゃありません。この時代の子どもたちは人数に数えられない、一人前の権利も認められていない存在でした。今だって親とか誰か大人の保護がなかったら、子ども一人で生きていくのは難しいでしょう。誰かに頼って助けられないと、自分一人じゃ生きていけないことを知っている者たち。自分の弱さと限界を知って、神様に頼って助けを求める、そんな子どものような者たちこそ天の国にふさわしい人なんだと、イエス様は弟子たちに教えておられるんです。

そういう意味で、私たち人間は誰もがみんな「子ども」のような者だと言えるでしょう。神様からも人からも離れては生きていけない、そんな弱くて小さな自分を認めて神様からの愛と救いに頼る者たちの群れ。それが教会という共同体です。今日ご一緒に読んでいる聖書の場面は、そういう教会の始まりを私たちに物語っています。

＜教会の始まり＞

五旬祭の日、イエス様の弟子たちに降った聖霊は、使徒ペトロの言葉を通して人々の心にまっすぐイエス様の出来事を伝えました。神様の民であ

るはずのイスラエルが、他でもない自分たちが、神様から遣わされた救い主を殺してしまったというまさかの事実を突きつけられて、ペトロのメッセージを聞いていた人々はショックを受けました。「心を打たれた」と訳されている元の言葉は、単なる感動じゃなくて突き刺されて激しく痛む、という意味を持っている言葉です。

人々はまさに、ナイフで心を突き刺されたような衝撃と痛みを味わったんです。

神様に従っているつもりで、神様を裏切ってしまっていた。そんな自分たちの間違いに、彼らは気がつかされました。こうしてほしい、こうなってほしい、という自分たちの願望に心を奪われて神様の思いを無視して、待ち望んでいたはずのメシアを十字架につけてしまった。そんな自分たちの弱くて未熟で罪深い姿を、彼らは知ったんです。

私たちはどうしたら良いんですか？何をしたらこの罪を償えますか？神様に赦していただく方法はあるんでしょうか？

怖くてうろたえて必死ですがりつく人々に、ペトロはこう答えています。悔い改めなさい。

イエス・キリストの名によって洗礼を受けて、罪を赦していただきなさい。そうしたら、神様からの賜物としてあなたたちは聖霊を受け取る。

辛い罰を耐え忍ぶことでも、修行を積んだり特別な知識を学ぶことでもなくて、神様はただあなたたちが悔い改めるのを待っておられるんだ、とペトロは彼らに教えました。

神様を無視して裏切っていた自分の罪に気がついて、神様の思いに向かって自分の生き方を方向転換させる、それが聖書が語る「悔い改め」です。

ただ私たち人間の心は弱くて、どんなに固く決心したことでも、自分で思ってるだけだといつの間にか欲望とか思い込みに流されて、歪んでしまうことが多いものです。だからイエス様の名前によって、つまりイエス様の助けを頼って洗礼を受けて、イエス様の死によって自分の罪が赦されたことを受け入れなさい。そうしたら、イエス様からの助けである聖霊が与えられる、とペトロは人々に約束しました。この約束はペトロたちの時代の人々だけじゃなくて、彼らの子孫の時代にも、そしてイスラエルだけじゃなくて遠くの国のすべての人に至るまで、場所も時代も超えて差し出された神様からの招きの約束だと、ここで宣言されているんです。

　ペトロの話を聞いて、イエス様を救い主と信じて受け入れた人々は、洗礼を受けて

弟子たちの仲間に加わりました。その人数はこの日だけで３０００人にもなった、と使徒言行録は伝えています。ちょっとありえなそうに思える人数ですが、数の正確さというよりは、私たちの「ありえない」を超えて聖霊が働かれた、ということを聖書は物語っているんです。こうして世界で最初のキリスト教会は始まりました。

　集まった人たちは使徒が語るイエス様の教えを聞いて、仲間同士で交流して、一緒に食事をして、熱心に祈っていました。それだけじゃなくて、彼らはすべての物を共有して、持ち物や財産を分け合いました。毎日エルサレム神殿で神様を礼拝して、家ごとに集まってはイエス様の晩餐を思い起

こして、一緒に食事をして神様を賛美していたというんです。素朴で美しい、理想的な共同体の姿だと言えるでしょう。じゃあ現代の私たちの教会も、自分の財産とか持ち物を放棄して、みんなで共有して分け合って、一緒に住んで共同生活をするべきなんでしょうか？それがいちばん正しい教会本来のあり方だ、と聖書は私たちに勧めているんでしょうか？　そういうことではないと思います。これはあくまで紀元１世紀のエルサレムでの出来事だということを、忘れてはいけません。現代の私たちが生きている社会と、当時のイスラエルの状況はあまりにもかけ離れています。古代パレスチナ世界は自然環境が厳しくて、飢饉や干ばつに対抗できる知識や技術もまだまだ発達していませんでした。他の国への侵略を制限する国際的な規制もありませんでしたから、強い国が他の国に戦争を仕掛けて武力で支配するのは当然のことでした。平等とか公平とか、個人の人権なんていう思想は、存在さえしていません。強い者が弱い者を利用して、搾取して、相手の命の価値を無視することも当時の人々にとってはごく当たり前のことだったんです。権力も財産も持たない人たちには、生きることそのものが厳しい世界で、初めの教会の人々は当時の「当たり前」を超えて、お互いの命を大切にし合ったんです。強かろうと弱かろうと、裕福だろうと貧しかろうと、関係なしで一緒に生きられるように。利用したり踏みつけたり無視したりという力関係を取っ払って、お互いの格差を手放してみんなが同じ１人の信仰者として扱われるように。かつてイエス様がそうなさったみたいに、どんな身分でもどんな性格でも、どんな人生を歩んできた人でも、一緒に同じ食卓を囲むことができるように。すべての人が神様の愛に従う神の国を生きるために、当時の彼らにとっていちばん良いと思える方法を、初めの教会の人たちは選んだんです。

「当たり前」を超えて、神様を愛してお互いを愛する。そんな彼らの姿が、周りの人たちにも暖かな気持ちを抱かせた、と聖書はその様子を伝えています。

＜教会として生きる＞

　じゃあ現代の日本で生きる私たちの教会が、神様の愛に従って神の国を生きるためには何がいちばん良い方法なんでしょうか？これはなかなか難しくて、「こうだ！」という綺麗な正解は出せません。少なくとも、状況や環境の違いを無視したままで、初めの教会の人たちのやり方だけを真似するのは違うだろうと思います。彼らは彼らの置かれた世界で、神の国を生きるいちばん良い方法を祈り求めて自分たちなりの知恵と力を尽くしました。それでもやっぱり揉め事は起こったと、同じ使徒言行録のあちこちに記録されています。

　失敗したり行き詰まったりを繰り返して、そのたびに祈って考えて、少しずつ変わりながら、教会は世界の歴史の中に立ち続けてきたんです。今ここに生きる私たちもまた、そうし続けることを委ねられている共同体です。「絆」という言葉の中には「傷」という言葉が含まれている、と福岡の北九州市でホームレスの方たちの支援を続けてい

る東八幡キリスト教会の奥田知志先生がよくいろんな機会に言っておられて、本当にその通りだと思わされます。同じ神様から招かれて、同じイエス様を救い主と信じて、同じ聖霊を与えられているはずの教会という絆の中にだって、必ず傷はあるものです。意見が食い違って争うことも、失敗も間違いも行き詰まりも、何もない教会なんて多分どこにもないでしょう。それでも、こんな弱さを抱え、知恵も力も足りない私たち人間の集団に、神様は聖霊を与えて、ご自分の愛と救いを伝える役目を任せておられるんです。だから私たちは心を尽くして、力を尽くして、思いを尽くして神様を愛するようにといつだって招かれています。
思いも言葉も行動も、自分たちの持っているすべてを差し出して、神様の愛を証言して生きるいちばん良い方法を祈り求め続けるようにと、いつの時代にもどんな場所でもすべての教会が招かれているんです。
何をどれだけ差し出したかなんて比べる必要も、優劣を決める基準もありません。私たち一人一人を呼び集めて、一人一人が差し出す精いっぱいを使って救いの出来事を起こすのは、他でもない神様なんですから。初めの教会の姿を描く今日の場面は、こんな言葉で締めくくられています。

「こうして、主は救われる人々を日々仲間に加え一つにされたのである。」
（使徒言行録２：４７）

神様が教会のいちばん大きな働き手で、私たちの最高責任者です。今日の物語から少し後、他の国々で使徒として働くことになったパウロもこのことをとても大切に考えていました。地中海に面する古代ギリシャの町コリントで、教会の人々の間に派閥争いが起きたとき、パウロはこんな言葉を教会に書き送っています。

「ですから、大切なのは、植える者でも水を注ぐ者でもなく、成長させてくださる神です。
植える者と水を注ぐ者とは一つですが、それぞれが働きに応じて自分の報酬を受け取ることになります。わたしたちは神のために力を合わせて働く者であり、あなたがたは神の畑、神の建物なのです。」　（１コリント３：7-9）

教会という共同体は初めの時から今もずっと、神様が育てておられる畑、神様が建てておられる建物として、力を合わせて働いて成長し続ける群れなんです。失敗したり行き詰まって、不安になって怖くなって「どうしたらよいのですか？」と訴えずにはいられないときも、私たち教会の土台はここにあります。
いちばん大きな働き手、最高責任者の神様がなさることに信頼して、それぞれの精いっぱいを差し出して力を合わせて働くなら、どんなに小さくて弱くて未熟でも、私たちは神様が育てる豊かな畑、神様が建てる揺るがない建物です。
お祈りいたしましょう。